

「本日は、起業家研究の第一人者、久我照正くがてるまささんにお越しいただきました。久我さんは、四十年以上にわたり、起業家や社会に大きな変化を与えた変革者へのインタビューも行ってきました。それでは、久我さん。ズバリ、優秀な起業家になる秘訣ひせつとは何でしょうか？」

「そうですね。正直、いろいろな答えがありますが、今回は私の回答をお伝えします。ズバリ、エゴイストですね。ただ、そのエゴの内容が、例えば、世界一の企業になるというエゴもあれば、世の中に大きな変化を起こしてやるというエゴもあります。はたまた、世の中のために役立ちたいというエゴもある。それが普通の人より、とても強い。それこそ秘訣のように感じます。そう考えると、たまたま自分の夢、というかエゴというものが存在し、結果的に手段として起業を選び、社会的に成功に至った人が、まあ優秀な起業家なのでしょうね。私としては、ノウハウや儲け方といった小手先より、まず自分がどんなことを行いたいのか。自己探求すべきかと、長年の研究で感じました。いや、これ自体もそう思いたいという、私のエゴですかね。あははは……」

県庁職員になって、早くも三年。しかし、立派な社会人には程遠い気がする。まだどこか気分は十九歳。年齢だけが勝手に進んでいくようだ。しかし、後輩たちも入ってきて、嫌でも自分が若手から年々離れつつある。もちろんいいこともあり、少しずつサボり方も覚えてきた。須賀健一は、いつものデスクにて、いつものように考えているフリをしていた。「おい、須賀。ちょっといいか」上司の望月が、自分の真後ろにいた。

「実はな、お願いがある。知事の佐賀さんの指示で、県庁の若手職員を対象にした、県を活性化させるアイデアコンペをすることになった。対象は三十歳以下。しかも、各課に関係する案を一つ以上は出さなきゃいけない。そこで須賀、ちょっと頼まれてくれないか？」

（ああ、面倒くさそうな話だ……）反射的に心の中で呟いた。

「そうなんですね。有り難い機会ではありますが、後輩の鈴木さんがやるのも可能ですよね？ 彼女の方が、天真爛漫てんまらんで上が喜びそうなアイデアを考えそうです」

「いや、それも思った。が、彼女はまだ一年目だし、企画の経験も無い。何より須賀自身、もう三年目だぞ。あの企画で、鳴り物入りで入った割には、このまま大人しくしていい

いのか。実績作りとして、頑張れよ」

ああ、これは遠回しの命令か。かつての自分なら、この言葉で燃え上がったかもしれない。しかし今は、淡々とサボる日々。正直やりたくない、面倒くさいと思ったが、「分かりました」と適当に返事をした。

かつての須賀は主体的ではあった。学生時代は経営学を学びつつ、地域活性化サークルの立ち上げも行っていた。中でも『甲府城下ワイン鉄砲合戦』相手の口にワインを届けろ』『は、全国メディアにも大々的に取り上げられた。』将来的にこんな企画をして、地元を盛り上げたい」と強く思うようになり、県庁に入ろうと考えた。しかし入庁後、その理想は打ち砕かれてきた。

学生というだけで、主体的に提案すると大人から喜ばれていた。が、今は反対。「実現性は？ リスクは？ リターンは？」と詰められる。「そんな提案より、自分の仕事をしっかりやれ」と言われる日々。じゃあその仕事もきっちりやってやろうじゃないかと思っていたが、全く分らない。できない。上司や先輩にたくさん助けてもらいながら、彼らの仕事の邪魔になる自分を嫌いになっていた。「俺ってこんなに何もできなかったのか……」そんな思いが重くのしかかり、いつしか自分から積極的に動くことはなくなった。休日は家でゴロゴロ。二年目から仕事にも慣れてきたが、やはりそれ以上のことはせず。ただ傷つきたくない、否定されたくない、楽をしたい。そんな日々が、今の自分を作り出していた。「なぐ、どうした?? シケた顔をして。便秘三日目?」

隣のデスクに腰掛けたのは、和泉華。県庁十年目で、同じ芸術推進課に所属している。彼女は、伝統工芸品の印伝を海外の日系ホテルの内装や小物として提案する、異色な仕事をしていた。ホテルの部屋に印伝製品を無償で設置し、宿泊客が実際に触れられるようにし、その場でECサイトから注文できる仕組みを整えた。まさに海外のホテルの部屋を、印伝のショールームにしてしまったのだ。加えて例の『ワイン鉄砲合戦』の時、県庁側のスタッフとして、実現に向けてフォローをしてくれた。

「いや、例の若手コンペのアイディアを考えていただけです」

「おう。そっか。私も出たかったが、年齢……。っておい、そのことに触れないで」

「何も言っていないですし、別にいいじゃないです」

「ふふ、冷めているね。まあ、須賀君はこういう企画が好きだったし、期待大だね」

（またか……）須賀は内心でため息をついた。

「ははは、まあそうですね。前向きに頑張りますー!」と、適当に会話を切り上げる。この

ままでいい、それでいい。しかし、和泉先輩が寂しそうな表情でこちらを見つめてくると、何を考えているのか、全部見透かされているような気がしてならなかった。

「で、次の議題だが、知事の若手コンペについて。うちの課からは、須賀君のアイディアを出す。須賀君からは、芸術推進課管轄の県民ホールを使った芸術祭の提案だ。県内にも似た成功事例もあり、実現性も高い。須賀君の方から何かコメントある？」

「いえ、特にありません」

「じゃあ、これで行くこうと思う。が、他のメンバーから見て、何かあるか？」

「質問してもいいですか？」和泉先輩であった。

「この芸術祭って、そもそもどうやって思いついたの？」

「ええと、今回は実現性と地元経済の活性化を重視して考えました。こちらの資料の通り、河口湖の事例でも、これだけの経済効果が確認されていますので……」

「ねえ。本当にそれでいいの？」先輩の一言で、会議室の空気が凍った。

「ずっと気になっていたけど、いつまでらしくないことしているの。素直に面白い企画を考えるのが、須賀君の持ち味だった。それがどうして、こう予定調和的なことしか考えられなくなったの？　これが須賀君の本当にやりたいこととは思えない」

一瞬、思考が止まった。ジャブを食らった気分であった。そして自分が注目されていることに気が付くと、ただ恥ずかしかった。そうだ、分かっている。こんなありきたりな提案、本音じゃない。だが、妥協するしかなかった。だって……。

「まあまあ、和泉さんの意見も分かるが、須賀君も随分成長したよ。実現性のある企画書が書けるようになったのは立派。今回は締め切りも近いし、この案で進めることにしよう。須賀君、よく頑張ったな」

上司のフォローは、ただただ痛かった。

「よー、税金泥棒。久しぶりだな」

甲府駅南口の焼き鳥屋で、久しぶりに顔を合わせた大原弥生は、開口一番に毒舌を放つてきた。今や彼は外資系メーカーのエリートだが、かつては『甲府城下ワイン鉄砲合戦』を一緒に企画した仲間。あの頃を思い出しつつも、今は距離も感じる。弥生は楽しそうに仕事の話をしていたが、やがて話題は移った。

「さて、ラインの件だけだよ」

須賀は会議の日、寝付けなかった。和泉先輩の言葉が頭をぐるぐると巡り続け、気がつけば弥生に「話を聞いてくれ」とラインを送っていたのだ。

「お前が悪い。というか、和泉さんの言うことは間違っていないだろう」

弥生は、核心を突いてくる。須賀は言葉を飲み込むが、苛立ちも少し感じる。

「いや、でもな、俺もどうしたらいいかわからないんだよ。県庁入ってから、自分の企画がつまらなくなつて。俺、才能ないんだなつて思う」

「何でそんな風に思い込んでんだよ。原因は？」

「いやだつてさ、入庁以来、色々提案してきたんだよ。若手で自主的に取り組みもやったし、公式の場でも意見を出してきた。でも、返ってくるのは『リスクだ』『実現性が』って否定ばかり。結局、通るのは妥協案だけだ。それが求められているんだよ、県庁つてころは。どれだけ県民から叩かれず、それっぽいことをするだけだ」

「それで？ いじけて何になる？ 数回失敗しただけで、もう敗北宣言か」

弥生の表情が険しくなる。こちらも、怒りが湧き上がる。

「うるせえよ！ お前に俺の苦しみが分かるのかよ」

「うるせえのはこっちのセリフだ。だったらラインなんかしてくんな、ボケカス」

お互い声を張り上げ、店の空気が一層緊迫する。

「お前は外資で自由にやれる立場だから、そんな無責任なこと言えるんだろうが！」

「外資だろうが県庁だろうが関係ねえだろ！ お前、本気で地元を盛り上げたいって言ってただろう？ 上司に否定されるのが怖い？ そんなしょうもないこと気にしてんのかよ。お前、誰に頼まれたわけでもなく夜中に企画書を書いていたあの頃を忘れたか？ 金もないのに土産もつて営業に行つたじゃねえか。だから和泉さんも、今のお前に物足りなさを感じているんだろ」

弥生が苛立ったようにテーブルを叩いた音が響く。こちらも反射的に叩き返す。

「分かつてるよ！ でも、今は無理なんだよ！」

「無理無理つて、いつからそんなに弱くなったんだ、お前。昔はリスクもクソもなくて突っ走つてたじゃねえか。それで何度も失敗しながら、やっと成功にこぎつけただろう？ 実現性やリスクがすべてだと思つているなら、お前、そんな県庁にしがみついて、地元のために何ができるんだ？ とにかく手段が悪いんだよ、分かれバカ」

「え？ 手段が悪い……？」その予想外な一言に引かかった。そして、弥生が少し声を落とし、静かに言った。

「そうだよ。できない理由ばかり並べて、自分を閉じ込めて、それを周りのせいになっているだけじゃねえか。県庁が、県庁がつてな。別に県庁外でやればいい場合もあるだろ。お前

は県庁の人間だから地域活性の企画をしたいのか？ それとも、お前自身だから地域活性の企画をしたいのか？ よく考えろよ、このポケカスクソタヌキが」

ふっと、肩から重いものが下りるような感覚があった。怒りと共に、肩の力が抜けていく。店内の視線を浴びながら、須賀は深く息を吐いた。久しぶりに裸の感情をぶつけて、心も軽くなった気がする。弥生の正しさが、心に痛いほど響いていた。

その様子を見て、弥生が、ふっと柔らかな声で問いかける。

「で、どうするんだよ。締め切りはもうすぐなんだろ？」

須賀は弥生を見つめ、口元に小さな笑みを浮かべた。

「ああ、大丈夫。何とかなりそうだ。ははっ。もう大丈夫。うん。ありがとう」

弥生も少し口元をほころばせ、黙ってうなずき、ジョッキの甲州を飲み干した。

「ぶっ殺してやる、徹底的に」

もちろん、本気じゃない。でも、学生の頃、何かをプレゼンするときはいつもそんな気持ちでやっていた。目をキラキラさせていた。他のアイディアにも負けない、自分の企画で世の中をひっくり返してやる。それくらいの意気込みで臨んでいた。そして今、その感覚が戻ってきていることが、何よりも興奮した。

「芸術推進課の須賀健一です。いよいよ私の番がきました。ここまで残れるとは思っていませんでしたが、残ってしまった以上、どっしり堂々、勇猛果敢にプレゼンさせていただきますので、どうぞ皆さん頑張ってお付き合ってください。」

まず皆さん、こちらの県民ホールの写真にご注目ください。八十年代に建設され、県内最大級のホールとして活用されてきましたが、正直、最近は利用率の低下と老朽化が目立ってきています。『もしかして僕と同じ年？』なんて、ホールに哀愁を抱く方もいるかもしれません。が、私はこれを地域活性化に使えないかと考えました。

そこで！ 佐賀知事、まずはこの動画をご覧ください。これはザ・ドリフターズの『8時だヨ！ 全員集合』です。『懐かしい！』と思った方も多いかと思えます。実はあるとき、私もふとこの番組を観る機会がありまして、客席を見渡すと、お年寄りから子どもまで、みんなが同じタイミングで笑っているんですよ。なんていうか『老若男女、全員集合』なんです。

でも、私たちって今、リアルなつながりが少し薄れた時代に生きている気がするんです。人恋しいというか、気がつくスマホばかり見ている、気がつく隣の席の人にも気づいてない。そこで、『今こそ、みんなで集まって笑える場が必要だ！』と感じまして、この『8

時だよ！『全員集合』を、なんとこの県民ホールで復活させたいと考えました！

(ぎわ、ぎわ、ぎわ、ぎわ)

はい、ぎわつきますよね(笑)。でもそれくらい話題性もあるってことですよこれ。よく考えてみてください、ホールの舞台を使って昔ながらの生放送を再現することができたから、ものすごい一体感が生まれると思いませんか？今の若い人たちはリアルの生放送の臨場感を知らないんです。スマホの画面しか見ていません。いきなり『全員集合』みたいなセットが崩れたり、思わぬハプニングが起きたりすると、『うわ、これ、ガチじゃん』となるんですよ。

「この『全員集合』には、老若男女が一緒に参加できる新鮮さと懐かしさが詰まっています。若い世代にはレトロブームのように、『アナログ生放送ってこんなに面白いのか！』という発見があり、年配の方には懐かしさによる脳への刺激や、ホールに定期的に通うという運動の習慣も作れます。『全員集合を見て笑うだけで健康になれる』ってなれば、お医者さんもニッコリです！笑いは最高の薬です。

また、もしこのホールから『全員集合』の復活がスタートすれば、ホールの認知度が上がるだけでなく、アナログ生放送でのホール活用方法としても注目を集めるはずです。『次回、スペシャルゲストの登場は〇〇社の協賛で！』なんて全国放送で流れたら、地元企業でも、ホールのスポンサーになりたいと思いませんか？

そして、これは私の夢ですが、この復活企画を全国展開して、他の都道府県のホールにも広げたいと考えています。『ホールってどうせ使ってないだろう』と思われる地域に、『全員集合』や他のアナログ生放送の力で活気を届け、まるで日本中が元気になっていく、そんな未来が作れたらと思います。

もちろん、これは楽な道ではない。でも夢みたいだなあって、むしろそれが面白いじゃないですか？やるなら、おもしろい方がいい。実現性無いか言われても、いや昔やっていたじゃんって話。どうせ苦勞をするなら、楽しい夢に向かって苦勞して、一杯しましょう！以上、提案を終わります。ご清聴ありがとうございました」

「負けっぶりよく負ける」

そういえば、そんな言葉が好きだったと思い出す。今回のコンペでは他の案が通り、俺の提案は落選した。正直、選ばれたアイデアは凡庸で、どこから見ても実現性重視で攻めが足りない。上司も「よくやった」とねぎらってくれたが、普通の県庁職員ならそれで「めでたしめでたし」とそのまま打ち上げコースだろう。

け☆ど☆ね。俺は須賀健一。ここで終わらないのが、俺である。この状況は想定済み。実は弥生と、県庁に頼らずにこの企画を実現するための作戦を立てていた。

弥生と話し合った時点で、俺の案が通らないのはほぼ確定だと思っていた。なぜなら、この企画案は「コンペで勝ち残りにくい構造的欠陥」があるからだ。それは県庁外の協力者を大勢巻き込む必要があるためだ。これが実現性のリスクとされてしまう。実際に事前準備段階で、かつて『全員集合』を手がけたテレビ局の担当者・秋元さんにも、県の正式プロジェクトとして進めるのでない限り、手伝うのは難しいと助言されていた。だからこそ、コンペは形式的なステップにとどめ、その後の既成事実を作る流れに進むことにした。弥生の話によると、世の中には既成事実を作ってしまう、話を前に進める方法があるという。例えば弥生の会社で、新しいイチゴ味のチョコレートを作りたいとする。普通はまず市場調査をして、「イチゴ味が売れる見込みがあります」とデータで上を説得する。しかし、上はリスクを嫌うから、細かい点で色々とツツコミを入れ、許可が下りないことばかり。そこでゲリラ戦的な方法だが、先にイチゴ味のチョコを作ってテスト販売してみる。もし売れたら、その結果を元に「こんなに売れますから、正式に販売させてください」と事実を突きつける。どんなデータよりも、実際の売上が一番の説得材料になるらしい。

俺も同じ手法で行く。前回の『ワイン鉄砲』も、周りが「やるしかないしょー」という空気だったから実現した。今回もその方法で、『やまなし文学賞』を活用することにした。

『やまなし文学賞』は今年で三十三回目になる。何よりの特徴は、地元紙に作品が掲載される。そこで思い付いたのが、文学賞の小説として、この取り組みを描き、それで県民に知ってもらうことだ。小説なら「私がどんな人間で、この企画にどんな思いを込めているか」を企画書以上に伝えやすいし、読者も興味を持ってくれる。読んだ県民がイメージを膨らませて「やってみたい！」と声を上げてくれれば、ムーブメントを起こせる。逆に声が上がらなかつたら、その程度の企画として終わる。とても民主主義的なアプローチだ。また小説をまるで企画書のようにして実現することは、とても新規性がある。これはビジネスの世界でよく使われる「ストーリーテリング」にも似ている、読者に共感呼び込む手法だ。今回が成功事例になれば、文学や小説の可能性を高め、その関係者のビジネスチャンスや文学の普及にも繋げられるはず。

もちろん、この作戦にはリスクもある。しかし、最悪何か問題が起きたとしても、あくまで「個人の創作としての架空の物語」と主張することで、県庁側への影響を最小限に抑えられる。一連の考えを弥生に共有し、慣れない手で小説に取り組んだ。

「もしもし、須賀健一さんのお電話でしょうか？」

電話口から聞こえた声に、内心「釣れた」と思った。取材依頼だ。話を聞くと、例の小説が、やはり選考委員会の間で話題というか、問題になっていたらしい。(下手すぎて目立ってたなんてことじゃないことを祈りたいが。選考委員の青山さん、なんかご迷惑をおかけして、すみません……)

また同時期に、弥生がテレビ関係の知り合いに「面白い県庁ネタがある」と持ちかけていた。それらを踏まえ、関心を持ってくれたのが、今回の担当プロデューサー、山田さんだった。山田さんによると、今度の彼の番組で起業家研究者・久我照正氏の特集が組まれる予定。そこで県内出身の若手起業家を紹介する企画が進んでいるという。しかも久我氏が「一般的な起業とは異なる仕事をしているが、起業家精神を持つ若者もキャスティングしたい」と要望していたらしく、俺がちょうどハマるということになった。

俺はこちらの状況も説明し、慎重にことを進めた。特に山田さんから、県庁の広報を通じて、正式に俺へのインタビューを依頼する流れを作ってもらうことにした。「知事発案の若手の力を活かすコンペをきっかけに、自主的に動いている職員がいて、ぜひインタビューをしたい」という筋書き。もちろん、県庁側もその提案を快諾し、取材許可が下りた。もともと、上司からは、「もともと何か企んでいたのか」と少しかたが、とりあえず笑った。

「須賀さん、お会いするのは二回目ですね。まずは『全員集合』の実現、おめでとうございます。前は熱意を語っていただきましたが、ドリフ世代の私もつい熱が入りました」「こちらこそありがとうございます。久我先生がドリフを見ていたとは知らず、本当に驚きました。今回は脚本と芸人の方々で新しい形を模索し、オリジナルな内容も増えました。が、元祖のファンにも喜んでいただきました。それに、取り上げていただいたおかげで、SNSでも注目を浴び、県、テレビ、ホール、広告代理店によるタスクチームが結成。ことが大きくなったため、県庁の大エースである小ノ澤さんという方がまとめ役を務め、スムーズに計画が進みました」

「本当に見応えがありましたよ。今回特に印象的だったのは、まるで飛行機のパイロットのように、変化する状況に対応しながら進めていった点ですね。SNSで話題になったとき、多くの芸人が協力を申し出てくれたとか。『#俺も集合したい』で、それも上手く活用しましたね」

「活用と言いますか、本当に皆さんに支えられました。私自身、リソースは何も持っていないで。しかも、多くの方と繋がり、力を合わせて価値を生み出すことができました」

「まるでキルトを繋ぎ合わせるように、今回の取り組みが面白く形作られましたね。まず、『全員集合』の復活プロセスを記録として、ドキュメンタリー風のドラマにし、毎週放送しました。タスクチームにあえて俳優も入れ、その感性が新たな要素となり、『全員集合』にも、ドラマにもいい影響を与えました。急いで放送するため編集は粗く、むしろ予定調和を崩し、これまでにないコンテンツとなりましたね。また、県内で寄席や若手芸人の路上ライブなど関連イベントも開催し、『笑こそ人生を救う』というテーマも共感を呼びました。さらに、収録当日はお祭りのような盛り上がりで、全国のパブリックビューイングも成功しました。映画館の応援上映のニーズを活用できると見抜いたのはさすがですね」

「ありがとうございます。それも秋元さんや山田さんをはじめ、皆さんの知見があつてこそです。特にこのドキュメンタリーは、県民への一種の『見える化』です。税金が使われているからこそ、そのプロセスも県民が知るべきと考えていました。また若手ライブなど、実は近所の靴屋さんの息子さんが芸人になっていて、彼の協力でスムーズに進みました。一滴の水が重なり合い、大河を生み、予想外の勢いを作っていく、本当に面白い取り組みになったと自負しています。さらに、北海道、群馬、岡山、長崎からも収録依頼が来ており、山梨県がノウハウを提供しながら準備を進めています」

「非常に面白い取り組みになりましたね。私は、若手ながらそれを仕掛けたあなたの素質に驚いています。かつて万博を粘り強く仕掛けた、元官僚の堺屋太一さんを思い出します。ただ、須賀さんが県庁を辞めることになってしまったのは本当に惜しい」

「堺屋さんには到底及びませんが、私の未熟さゆえの結果です。県庁内のルールを無視し、自分本位で進めたことで、最終的には県庁での居場所を失いました。県職員としてゲリラ的な方法は認められないと理解していましたし、公務員としての規範も逸脱していたと思います。しかし、地域にメリットがあったと、数字上でも確認できたことに満足しています。ただ悔やまれるのは、見守ってくれた先輩に迷惑をかけてしまったことです。私の親友を通して、私を奮い立たせようとしてくれましたから」

「とはいえ、今回の経験で得た学びも多かったのでは？」

「ええ。今回ほど『組織』について考えさせられたことはありませんでした。組織には大きく二つの意味があると感じます。一つは『所属する人たちを守るための組織』、つまりお互いを助け合い、安全を確保する『社会』としての組織。もう一つは『共通の目的を達成するための組織』、つまり目標に向かって機能するための枠組みです。前者は安定をもたらす枠組みであり、後者は目的達成の手段です。不景気もありますが、今の多くの組織は

前者を優先してしまい、後者が疎かおろそかになっていくかと思えます。だからこそ、前者に沿った組織構造が強くなり、それを順守する人たちが増えていく。そのため、リスクを伴う新規事業や投資といった、結果的に組織の延命つなに繋がるチャレンジが難しくなります。『出る杭は打たれる』と言いますが、ある意味では、組織を守るための機能がしっかりと機能していることを意味するのもかもしれません」

「なるほど、組織が組織を守るからこそ、出る杭を打ち、リスクを減らす」

「はい。そして、その組織が進んでいくとどうなるか。リスクを減らす社内管理が徹底され、ちょっとしたグレーな行動や、少し余裕のある方法も許されなくなります。私はグレイというか、泥臭さがあるほうが動きやすい。しかし、そうした柔軟性が認められないため、組織はますます無菌の消毒液のような、きれいでリスクの無い、『正しい』環境に近づいていきます。

その結果、機械にはいいかもしれませんが、人が働くには息苦しい、『正しすぎる』環境になってしまいます。アウトプットも無機質でどこか欠けたものになり、自分が何のため
に仕事をしているのかも見失う。そして、皆がストレスを抱えたり、逆に隠れた不正が増えたりと、変な状況に陥ります。私自身、身をもって体験しました。

じゃあこの組織を変えようといっても難しい。特にその組織に従順で勝ち残っていく者ほど、出世し、力を持つ。余計にこの状況を変えていくのが難しくなっていく。そして彼らも、組織機能に従い、悪意があるわけではありません」

「そうしますと、今の組織構造が原因ですかね」

「そこも難しいです。今の組織は規律を与え、安心して働ける環境を提供しています。一定のメリットは必ずあり、その全てを二元論的に悪と捉えるのは、傲慢ごうまんです」

「じゃあどうすれば、組織はうまくいくのでしょうか」

「そうですね。正直、いろいろな答えがありますが、今回は私の回答をお伝えします。ズバリ、バランスです。右左のように、それぞれの主義主張で対立するのではなく、異端な存在も活用しつつ、組織としての規律と環境を守る。お互いの立場を理解し、物事を采配していく。特にそれぞれのいいところを色眼鏡無く使える人こそ、組織や県政を前に進めていくと感じます。私にはとてもできませんが。

そして、そうできる人は、人間的にもできている人だと思えます。私たちは税金や人口減少といった目の前の事象ばかりに目が行きがちですが、もっと根本的にアプローチすべきことがあったのかもしれない。押し付ける多様性ではなく、本当の多様性といえますか、日本で言う和の精神といえますか、それができる人こそ重要と感じます。私は今後、そういう素質のある人を支えていきたい。ただ、これも一方的な考え方で、否定的な意見

も多いと思います。だからこれも私の夢というか、やはりエゴであります」

了